

『万葉集』 — 手枕まきて —

福岡市 上城 誠

巻1、巻2、巻3のいわゆる「初記万葉」と呼ばれるもの、その「歌」につけられている「標目」「題詞」は無条件では信用できません。このことを確認してみます。

巻2・217番に

吉備津采女死時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

(吉備津の采女が死にし時に、柿本朝臣人麻呂)が作る歌一首 并せて短歌)

と題する歌があります。

秋山の したへる妹
なよ竹の とをよる児らは
いかさまに 思い居れか
栲縄の 長き命を
露こそば 朝に置きて
夕には消ゆるといへ
霧こそば 夕に立ちて
朝には 失すといへ
梓弓 音聞く我も
おほに見し こと悔しきを
しきたへの 手枕まきて
剣大刀 身に副へ寝けむ
若草の その孀の子は
さぶしみか 思ひて寝らむ
悔しみか 思ひ恋ふらむ
時ならず 過ぎし児らが
朝露のごと 夕露のごと

この歌が抱えている問題は大きいのです。

- a, 「題詞」に吉備津采女とあるけれど、「吉備」につながる語句が、長歌にも、短歌にもない。
- b, 「采女」が死に、残されたのは、その「夫」だというのが従来の読み方だが、「采女」に「夫」が居ること自体、不審だ。
- c, 万葉集は全文漢字で書かれている。「音」(発声)よりも「漢字の意味」が重要なはずだ。一字一音表記で「都萬」(つま)とあれば、歌の内容によって「妻」か「夫」にわかれるであろうが、「夫」を表現するのに、わざわざ「女偏」をもった「孀」を使用する理由が理解できない。

これらを確認したうえで従来の現代語訳をみてみます。

秋山の美しくいろづくような妹、なよなよした竹のようなしなやかな子は、どう考えていたのか。栲縄(布でつくった縄)のごとき長い命であるものを、露だったら朝おいて夕べにはもう消えるというし、霧だったら夕べに立ちこめても翌朝にはなくなってしまうという。

この采女のことを梓弓の音のように評判をきいていた私も、ぼんやりとしか見たことがないのだが、布を重ねた枕のように手をかわしあって、剣の太刀のように身体を寄せて寝た若草のような夫は、いまは寂しく思慕しつづけて寝ているだろうか。采女の死を悔んで恋いつづけているだろうか。寿命をまたずに死んでいった子が、朝露のようにも、夕露のようにもはかなく思われる。(中西進『万葉の秀歌』講談社現代新書)

万葉学の一般的な語訳として中西氏の文を引用させていただきました。

このように題詞に合わせて現代語訳を完成させています。先に挙げた疑問点には触れてもいません。私たちは、私たち自身で考えてみましょう。

この歌の原文に

何方尔 念居可 (いかさまに 思ひ居れか)

とあります。

この部分を、従来説では、すべての論者が過去完了の形で約しているのですが、原文では現在進行形です。原文に忠実に読むなら、

「どのように思って生活しているのだろうか。」

となります。

「秋山の美しくいろづくような妹」「なよなよした竹のようにしなやかな子」は生きているのです。

しかし、それは、という方もいるでしょう。次に、原文

手枕纏而 (手枕巻きて)

を考えてみます。

一般的には、手枕をするという動作は、”男女どちらもする”と考えられて、万葉集の各歌も、そのように読まれてきました。しかし、それは本当でしょうか。

『古事記』の中の「小碓命」の歌に注目してみます。

ひさかたの 天の香具山

利鎌に さ渡る鵠

弱細 撓や腕を

枕かむとは 吾はすれど

さ寝むとは 吾は思へど
汝が着せる 襲衣裾に
月立たなむよ

この歌にあるように腕枕(手枕)をさせようとする。いいかえると手枕をしてもらうのは男性です。

万葉集全体を調べてみました。私には、どの歌とも「手枕まく」行為は女性の仕草を表現しているとしか理解できない歌ばかりでした。

巻6・1032番

天皇の 行幸のまにま 我妹子が 手枕まかず 月ぞ経にける

(天皇の行幸に付き従って、我妻の手を、枕にせず、月日が過ぎてしまった。)

大伴家持作、同じく1036番も問題なく女性の仕草でした。

東歌として有名な巻14でも

3480番

大君の 命かしこみ かなし妹が 手枕離れ 夜立ち来ぬかも

(大君の 仰せを恐れ謹んで いとしい妻の手枕を離れて 夜立ちして来たよ。)

東歌でも「手枕巻く」のは女性です。

従来、これこそ男性のする手枕を歌っていると解釈されている歌が2首存在していますが、その歌はどうでしょうか。

神亀5年 太宰師大伴旅人が亡き妻を慕って作った歌 3首(438～440番)です。

巻3・438番

愛しき 人のまきてし しきたへの 吾が手枕を まく人あらめや

今までは、こう説明されています。

(いとしい妻が、枕にして寝た、わたしの腕を、枕にする人があるだろうか)

私の読解は、こうです。

(いとしい妻が、腕を巻いて、してくれた手枕を、妻が亡きあと、してくれる女性がいるだろうか。)

そして、この読解の正しさは、次の439番が証明してくれています。

帰るべく 時はなりけり 都にて 誰が手本をか 我が枕かむ

(帰郷できる 時期にはなつたけれど 都に帰ったら 誰の手を枕にして寝ようか。)

そうなのです。あくまでも男性は女性の手を枕にして寝るのです。「手枕巻く」のは女性の動作を表現するのです。

以上で、217番の

手枕纏而 (手枕巻きて)

が女性の動作であると判りました。しかし、それ以上に、この歌の内容を決定づける語句

があります。

劔大刀 身に副へ寝けむ

です。従来、「劔大刀」は、たんに「枕詞」として処理されてきました。

”「刀劔を身につけること」から「身に添ふ」に、研ぐことから「磨く」に。また古く「刀」を「な」といったことから同音の「名」「己(な)」にかかる”と。ここで忘れてはならないことがあります。「劔大刀」が象徴する第一のものは、「男性」だということです。

「劔大刀を身に添えるのは男性」ですが「劔大刀に身を副える」のは女性です。

巻4・604番では

劔大刀 身に取り副うと 夢に見つ 何の兆そも 君に逢はむため

(劔大刀を 身体に副え持った夢を見ました 何の前触れでしょう そうです あなたに逢いたいためなのです)

この歌は、笠女郎が大伴家持に贈ったものです。「劔大刀」が、たんなる枕詞なら「劔大刀」を身体に副え持った夢を見たことが、家持に逢いたいという願望のあらわれですとは歌えません。「劔大刀」は男性を象徴する語句なのです。

私たちは、ここまで確認してきた

(いかさまに 思い居れか)

(手枕巻きて)

(劔大刀 身に副え寝けむ)

の語句によって、巻2・217番に歌われた

「若草の その嬢の子」

は、「夫」(男性)ではなく、原文にあるとおり「嬢」(女性)なのだと理解できたのです。

古田が指摘した 巻1・2番歌と同じように、この217番においても「題詞」から「歌」を理解する、「歌」をよもうとするのは、間違いだったのです。217番の正しい読み下しは

秋山のように美しく色づいた女性は なよなよした竹のように しなやかな姿の
女性はどう思って暮らしているのだろうか 布でつくった縄のように長い命なのに
たしかに、露であったら、朝できて夕方には消え 露なら、夕べに立ちこめても 翌
朝にはなくなってしまふけれど その男性が死んだという噂を聞いた 私でさえ
も 今まで気にもとめずに接していたことが 悔やまれるのに 手枕をしてあげて、
その男性(夫)に 身を寄りそえて寝た、その若き妻は いまは寂しく思って寝てい
るだろうか 夫の死を悔しく思って 恋慕っているだろうか 思いがけなく 死ん
でいったあの男性が 朝露のようで 夕霧のようで

となります。

「題詞」ではなく、歌そのものを読まなくてはなりません。

古田の残した「万葉集」における課題に、柿本人麻呂と「中皇命」は同時期の人物であるということがあります。

「伊勢への長期航海」に人麻呂の妻が同行し、それを人麻呂が歌っている。また、人麻呂の「白村江陸戦」への参加等そこから見えるものは「明日香皇子」の父親の問題です。機を改めて、その点を論じてみたいと思います。